

# 総合科学

1974. 7. 8.

広島大学総合科学部  
広報委員会



|                              |    |
|------------------------------|----|
| 総合科学への招待 .....               | 2  |
| 忸怩たる思いとともに .....             | 3  |
| 広大総合科学部の誕生をよろこぶ .....        | 4  |
| 思い出すこと想うこと .....             | 5  |
| 創造——地域文化コース紹介 .....          | 6  |
| 社会文化コース紹介 .....              | 7  |
| 情報行動科学コース紹介 .....            | 8  |
| 環境科学コース紹介 .....              | 9  |
| 共通講座外国語を思う .....             | 10 |
| 保健体育講座 .....                 | 12 |
| ボクの願いと意識の流れ .....            | 13 |
| 総合科学部設置申請書の<br>作成にあたって ..... | 14 |
| 編集後記 .....                   | 15 |

No. 1

# 総合科学への招待

今堀誠二

日本で最初にできた、そして現在までのところただ一つの、総合科学部に入学された諸君に、心からお祝いを申し上げます。どんな学部でも、第一回の入学生からは、すばらしい人物を輩出しています。学生自身はもとより、全教官が新しい学部を創造していく情熱にもえ、みんなが協力してハリ切って勉強するからでしょう。それが諸君の場合は、総合科学という、世界のトップを切って進む学問を、専攻しようというのですから、諸君こそ次の時代をになって立つ人間になられることでしょう。われわれだけでなく、日本全体がそれを期待しています。

例えば皆様の中に、山大の入試に失敗して、広大にこられた方もあるでしょう。中には阪大を振って、こちらに移られた人もいられるかも知れません。ところが現在、東大では、広島総合科学部のことを勉強するのに大忙しです。林健太郎総長は、私の親しい友人ですが、その東大の教官や事務官が、入れかわりたちかわり、広島に来られて、わが総合科学部のことを勉強されています。

総合科学は時代の先端をいく科学です。20世紀を支えてきた近代科学は、間もなくその歴史的使命を終えて、老兵となって消えていきます。これに代って、人類の歴史をになっていくのが総合科学であり、諸君はそれを勉強するためにわが学部に入學されたのです。

近代科学はたしかに偉大でした。いや現在でも偉大です。ただ、毒ガスをつくり、原爆を作り、公害を作り、戦争をひき起こし、近くは石油ショックで物価を暴騰させました。近代科学は分析科学です。それがナイロンをつくり、ペニシリンをつくり、テレビを発達させました。その功績はきわめて大きいのです。しかしその近代が交通戦争で大量殺人をやっており、水俣病や原爆症をつくっているとすれば、近代科学は、その学問の本質に問題があると言わなければなりません。

総合科学は人間科学であり、生命科学であり、情報科学であり、環境科学です。すべての生きと

し生けるものが、バランスをとって共存していく道を研究する科学です。生命・人間・社会・自然などに共通する、制御機構とか、発生・発展・老化とかいった現象が、どうしておこるのか、その本質を解明する科学なのです。

他学部の一部の学生は、総合科学部を非難して、アジア侵略の要員を育成する学部だなどとヤジっています。アジアに戦争をひき起こし、アジアに経済的混乱をおこさせているのは、近代社会の一大欠点です。そうした状態をなくするには、総合科学を発達させる以外に、どんな具体策があるで



しょう。戦争とか侵略を制御する、その機能を明らかにするのが総合科学なのです。世界から原爆をなくし、戦争をなくし、サリドマイドを作らないようにするためには、総合科学の確立が必要なのです。総合科学部を非難する学生がいたら、こころみにたずねてみて下さい。「君は原爆をなくす方法を知っているのか。またそのために、君自身が、これまでにどんな具体的努力をしてきたのか」と。

閑話休題、総合科学は近代科学に代る、新しいディシプリンをうちたてようとしています。その為にはまず近代科学をマスターせねばなりません。近代科学を十分に勉強し、同時にその欠点を

も理解して、それをのり起えることが、総合科学を学ぶ道です。近代哲学なり、近代物理学なりは、勉強せねばなりません。ただ総合科学部で、例えば哲学と物理学を勉強した上で、両者を比較してみると、近代科学の特色と欠点がはっきりつかめるはずで、その欠点を克服する道を求めることにより、いつしか総合科学に導かれるというわけです。

皆さんの中には湯川秀樹博士の自叙伝「旅人」を読まれた方も多いでしょう。湯川さんは若いときに、中国の古典を勉強していますが、とくに莊子からヒントを得て、あのすばらしい理論をつくりあげた由です。また仁科芳雄博士のようなすぐれた教師と、朝永振一郎氏のような友人がたくさんいて、教師も学生も一体となり、共同研究をつづけているうちに、ノーベル賞が生まれたのです。

総合科学部は、湯川さんの行き方を手本としています。私たち 150人の教官は、120人の学生諸君と一緒に、新しい文明をつくっていく考えです。

私は学生諸君が、就職がどうだとか、社会的地位がどうだとかいうことに心をわずらわすことなく、純粋な気持で、勉強一本でまっすぐに進めることを希望します。外国語などは、毎日やってほしいのです。勉強さえおこなえば、諸君の前途は洋々たるものです。実力さえあれば、オキュペーションなどいくらでもあります。若さは二度とはかえらないのです。一刻一刻を大切に、21世紀をにうに足る、底力を養成して下さい。みなさんが幸福で生き甲斐のある人生がえられるかどうか、その勝負はこの一年間できまります。

(総合科学部長)

## 忸怩たる思いとともに

羽 白 幸 雄

それは遠い過去でもないのに、それについての事実関係も日時の記憶も、すでに遠く霞んでしまったような気がする。広島大学教養部の創設にかかわる記憶のことを言っているのである。国立大学としては広島大学と神戸大学とが最初の教養部をもち、そのためには私なりに無い知恵をしばって努力をしたはずなのに、われながらふしぎに思うほど記憶が霞んでいるのである。霞む……この事は、考えてみればいかにも皮肉で象徴的でさえある。

教養部の功罪については問われてすでに久しい。そこばくの独自性を身につけ、あれこれ牛歩の前進があったにしても、あそこにもここにも年を追うてほころびが目立ちはじめ、取り繕いに疲れ果てる毎日であった。このような覚束ない跋行の前途に、やがてくろぐろとした厚い壁が見えてきた。この厚い壁を前にして、徒らに数のみふくらんだ学生群が無人格集団となってうごめいている。間もなくこの集団のなかから改革の怒号が烈風のように叫ばれ、黙示録的な幻想と啓示の風雲はただならぬものがあつたが、人みな愕然として今更のように、忘れかけていた「初心」に醒めた、と言

えるのではあるまいか。

傷だらけの教養部に心ひかれながらも、やがて私は大学を去ったのであるが、それからの先生方の苦心と努力は並大抵のものではなかったに違いない。ほころびの繕いではもう間に合わないからである。みずからの深い傷にきびしい鞭をふりおろすにも似た苦悶であつたものと想像にあまりある。繕いではなく、初心に立ち帰つての、教育と研究の建て直しがはじまつたのであろう。学問体系の組み直しははじまつたのであろう。

荆棘(けいきょく)という言葉しか思い当たらないほどの毎日であつたに違いない。新学部の構想を仄聞するにつけても、ただ驚嘆のほかはないのである。

しかしプログラムのいかにかわからず、精気にみちた学道は、やはり「師資相承」という人間的なものではあるまいか。よき研究環境のなかで、しかしそれに甘えず自己をきびしく鍛えた師なくては、資の創造性はうまれてくるものではあるまい。そこにこそ活潑々地のういういしい学問がめばえるのに違いないからである。

新学部の創設を聞くにつけ、かつて全学改革委

員会の席につらなつた者として、わが身への鞭の痛みを感じながらも、ひとしおの感慨をもって心

からの敬意と祝意をささげたいと思うのである。  
(元教養部長)

## 広大総合科学部の誕生をよろこぶ

佐 藤 秀 雄

1、新学部の誕生をよろこび学生諸君の合格を祝す。

このたび広島大学に総合科学部が創設され、全国多数の入学志願者の中から選ばれた学生諸君を迎えられたことは、まことに芽出たく又力強い限りである。

総合科学部というのは全国ではじめての学部と聞くが、新しくこの学部を設置された趣旨を伺うと、新しい時代の要請に答えてこれからの社会の指導的立場に立つ立派な人材を養成するために、先ず基礎的な学問を十分に身につけることを重点にしておられる由で、まことに我が意を得た感を深くするのである。いずれの道を学ぶにも、将来大成するためには、はじめにその基礎をしっかりと身につけることが大切である。総合科学部は新時代をになう人材を養成するために、大きな理想をもって設置されたことと思ひ、まことによろこびに堪えない。

### 2、旧制広島高等学校との関係

旧制広島高等学校は大正13年に創設され、昭和25年戦後の学制改革によって広島大学の母胎として合流することになったのである。したがって広島高等学校と現在の広島大学は切っても切れない深い関係がある。昨年10月広島高等学校創立50年を記念して、全国から恩師、同窓生700余名が旧広高の地を集って記念式典を行ったが、その式典に来賓として出席された広島大学長の飯島宗一先生は、その祝辞の中で次のように話されたのである。

「広島大学はその広島高等学校の後進校として少なくとも当時の広島高等学校の基本的な精神を継承し、それを発展せしめる義務を担っておるものと自覚しております。……(中略)最近ようやく総合科学部の創設を決意いたしまして、できれば来年度からそれを発展せしめて行きたいと考えております。それは基本的なりべらるアーツカ

レッジとして、最も深く人間性形成にかかわるところの諸問題を、旧広島高等学校の基本的精神を新しく開花せしめて、青年に与えたいという念願に出発をしているものであります。」

このようにこのたび設置された総合科学部は旧制広島高等学校の基本的精神を根底においた学部ともいえると思うのであって、私ども広高卒業生としては、この学部に深い親密感を抱き、その誕生を心から喜んでいるのである。よ

先日総合科学部長の今堀誠二先生は、わざわざご来訪下され、その際総合科学部の趣旨を説明されたのであるが、将来この学部と旧制広高同窓会との密接なつながりをつけるため、同窓会幹部との懇談会を考えたいと話されたのである。このことは同窓会のわれわれとしてはまことに有難いことであつて、大いに期待しているところである。

### 3、志を立てて充実した学生生活を

私は新たに入学された総合科学部の学生諸君に近親感を持つが故に、僭越をかえりみず卒直に希望を申し述べるのであるが、どうかこの学生時代に一生の志を立てていただきたい。立身出世を主とするのでなくて、真に意義ある人生を送るための大志を立てていただきたいと思う。この時に志を立ててそれを一生続ける覚悟をかためることが肝要と思われる。

わが国の現状は、底の浅い経済繁栄の上にあぐらをかいて、利己主義、物質万能、享楽本位に流れて風を為し、精神的、思想的には真に憂慮すべき状態であると思われる。

新学部が新時代をになう人材の輩出を期待して学生諸君の奮起を望んでおられるのは心強い限りである。どうか将来小成に安んずることなく、人間的、人格的に大成を志し、常に学生の本分を守って一生悔いすることなき真に充実した学生生活を送られることを望んでやまない。

(旧制広島高等学校同窓会長)

# 思い出すこと 想うこと

浜 井 一 郎

私も、かつて教養部に身をおいた者として、この総合科学部の誕生に、心からの満足と、歓喜にひたっている一人です。

総合科学部創設の構想は、あの44年に全国を吹きまくった大学紛争の嵐の中で、各大学に改革の火の手があがった時、わが教養部が取り組んだ第一の目標でありました。そしてあの紛争の余波を、いつまでもかぶり続けた教養部が、一方において全共闘学生の種々な妨害を制しつつ、前例のない学部・学科の内容編成に、英知を集めて、はじめて旗印を打ち立てたのでした。

しかしこの苦心の企画に対して、45年の末だったかに広島大学一般教育・教養部問題委員会が発足はしたものの、各学部の批判は実に厳しく、その理解を得るために部長をはじめ評議員、委員であった先生方が、どれだけ精根を傾け尽くされたことであつたか。評議会や委員会から戻られた方々の、悲痛な面持ちを見るに忍びなかったことが、幾度あったことか。ようやくにして概算要求提出にまで持ちこんだ後になってさえ、各学部を次々に説得し歩いて、尚、白眼視されたあの悲壮だった思い出が、昨日のこのように、まざまざと目の前に浮かびあがってきます。

当時の教養部にいた者にとって、あの頃が忍辱の日々であつただけに、報われた今日のこの喜びは、筆舌につくせないものがあります。

正直なところ私は、皆様の努力のお蔭で概算要求の段階は踏めましたが、大体にそれまでの概算要求常識では巨人程度に出して精々赤ん坊なみ、まずくゆくと月足らずになったり、生れそこなう憂き目をみることも多々あったことなので、心の内ではひたすらに祈るのみでした。しかも、同時に、より大きい広大の統合移転の要求と重なっていたこともあって、仮りに認められたとしても「小さく生んで大きく育てる」覚悟でいなければならまいかと思っていたことは事実です。

然し待ちに待った47年度の概算内示に、広大移転とからみ合せて調査費がついたことを知らされ、

喜びと共にこれからが本番だと勇み立ったことでしたが、4月には散々苦勞された松本部長が現今堀部長と交代され、私も何一つお役に立たなかったまま停年を迎えて退職、成り行きを外から見せてもらう立場になりました。それから2年、皆様のたゆまぬ御努力を、蔭の便りにききながら遂に今日を迎えたのでした。

思えば大学改革のかけ声が、こだまとしてだけ残っていた中で、本当の改革案を練りに練りあげ、かつての大学紛争の念仏の一つとして、手きびしく追及された一般教育のあり方。又、全国立の教養部長会議では毎度議題となり20数年の経験の上に立ちながら、どうあらしむべきかに悩んでいた一般教育の問題、教養部のあり方を、あざやかに解明し、脱皮し得たこの成果は、新制大学史上の大偉業と言って過言ではないでしょう。

それだけに本省も高く評価してこれ程のものを与えてくれたのでしょうし、将来に大きく期待をかけていることと思います。

先を越された全国の教養部が、また批判とともに成り行きをまかせた他学部の、厳しく見つめる目を忘れず新しい道を立派に顕示され、折角大きく生れた新学部を、ただに肥満児たらしめず、心身共に充実した健康優良児に育てられんことを希ってやみません。

13人に1人の難関を見事突破された新入生諸君も、わが学部が全国の注目の的であることを自覚し、晴れの新学部の使命に添うべく精一杯励まれることを祈ります。

最後になりましたが、終始大きな力で導き育てられた飯島学長をはじめ、生みの苦しみに耐え、一致団結今日をあらしめた新学部の皆様ならびに、辛苦を共にされた多数のかつての教職員の方々に深甚な敬意を表する次第です。

(前教養部事務長)

総合科学という新しい学問について、便覧等の説明とは別に、広報委員会では学部の発足に当って再度各コースに、大いに意欲的、主張的な意味をこめた紹介の原稿をお願いしました。

## 創造——地域文化コース紹介

中 川 徳 之 助

地域文化コースは、地域文化について研究するコースである。世界にはさまざまな地域があり、それぞれの地域にはその地域に培われた文化がある。地域固有の要因によって、文化はさまざまな多様性を示すが、また、人類の文化としての等質性をも内在させる。地域文化コースは、文化のこのような多様性と等質性について考え、それぞれの地域文化の特性を認識するとともに、人類の文化の本質についての理解を深め、文化の発展と創造に貢献しようとするコースである。現在のところ、地域研究としては日本研究・アジア研究・ヨーロッパ研究・英米研究の四講座があるが、この四講座で世界のあらゆる地域を対象とすることができないことは明らかである。また、一つの地域についても、教官の研究分野から言って、かたよりがある。この点、新設の学部としての不備は認めざるをえない。将来の充実を期している。地域文化コースには、この四講座のほかに、比較文化研究講座がある。各地域の文化を比較研究し、それらに通ずる人類文化の等質性を考え、文化の根源を探ろうとする講座である。

学生諸君は、地域文化コースに入ると、主専攻と副専攻とを持つことになる。

主専攻というのは、五講座に応じて、日本研究・アジア研究・ヨーロッパ研究・英米研究・比較文化研究のうち一つを選んで主として研究することである。

およそ文化について考えようとするれば、ある点に焦点をしばって深く研究することと、広い領域にわたる豊かな知識を養うこととがともに望まれる。鋭利なかみそりの切れ味と、おのの巨木を倒す迫力とがともに望まれる。主専攻は、対象とす

る地域について、幅ひろい知識を与え、総合的な理解を深めるであろう。

副専攻というのは、哲学・歴史学・地理学・文学など既成の学問体系の一つを選んで、主専攻とともに、研究することである。副専攻は、既成の学問体系に研究の足場を置くことによって、研究方法を鍛える場となり、やがて自己の方法論を確立し、新しい学問体系を創造していく上に役立つであろう。

既成の学問体系に依らず、学生が自分の関心を持つ研究テーマを副専攻として設定することもできる。たとえば「都市論」など。このような場合は、現代的な問題を皮相に追うのではなく、問題を的確にとらえ、それを追究する視点の確かさが必要である。

「地域研究」ということばは、諸君にとって、かならずしも親しみのある概念ではないだろう。自分が研究しようとする文化の地域区分を示す概念が、「日本研究」であり「アジア研究」であると単純に考えているかもしれない。たしかに、現在の段階において、「地域研究」という一つの学問体系がすでに確立しているとは言えない。しかし、哲学的・歴史的・地理学的・文学的、また、政治学的・社会学的・経済学的・文化人類学的といった観点よりする研究が、やがて総合され、構成されて、まさに「地域研究」と呼ぶにふさわしい総合研究が諸君の手によって樹立されることを信ずる。

総合科学部という一つの学部が創設された。この学部で、教官と学生とが一体となって、われわれはなにを目指して進もうとするのか。われわれの歩みは、まことに遅々たるものかもしれぬ。わ

れわれの営みは、まことに些々たるものかもしれない。しかし、人類の文化に真に貢献するものは、現実にあつては、つねに遅々たるもの些々たるものではなかったか。そのことは、人類の文化の培われて来た時間の長さ、人類の叡知の崇高さを証している。いたずらに大言壮語するのではないが、われわれのひとりひとりが、人類の幸福のために、「文化」の土壤に黙々とくわを打ち込む。そのための学問をしようではないか。いわれなき権威にとらわれず、つねに新鮮な力をもって、未来を拓くために努力しようではないか。そのために、われわれは創造の精神の火を燃やしつづけようではないか。

土壤に種子が落ちる。それが根を張り、枝をのばし、葉を茂らせるのは、種子のエネルギーであ

る。諸君が地域文化コースにおいて自己の生を開花させていく、そのような内発的な迫力が勉学に示されることを期待する。

諸君は、広い知見に支えられた実力を養うために、総合科学部が一学科であるという利点を十分に活用し、社会文化・情報行動科学・環境科学に関する知識を吸収し、語学力を身につけ、洋々たる将来において、活躍の場を自分の力で拓きうる人物になってほしい。

総合科学部の第一回の卒業生となるべき諸君は、総合科学部の歴史の最初の一ページを自分の手で書きつらねることになる。総合科学部が将来どのように発展していくか、諸君の自愛と奮闘とをわれわれは祈っている。

## 社会文化コース紹介

社会文化コースは、社会科学を中心に学習するコースである。

従来、社会諸科学は対象のちがい、従ってその研究方法のちがいによって、経済学・政治学・法学等と区分されてきた。しかし、現代社会はその発展の過程で、それら各対象相互の結びつき、相互作用を著しく強めてき、周知の通り、経済は国家（政治）と、また、思想・文化現象も社会の諸運動を通じて、経済、国家その他への影響を強めている。さらに、科学は技術に、技術は生産に、生産を通して経済に、巨大なインパクトを与え、従ってまた科学・技術・生産と社会諸法則との連関のあり方は、現代の最もアクチュアルな問題の一つとなっている。

これらの客観的現実をふまえて、われわれは現代社会を、科学・技術・経済・政治・法・文化等の有機的統一物として捉え、多面的かつ総合的に研究・教育するため、社会諸科学の伝統的な区分にとらわれない単一の大講座として社会文化研究講座を設けている。

このように捉えられた現代社会を研究するにあたり、本講座は次のような二つの研究主題、(1)「社会構造」、(2)「技術・開発」を設け、これを主軸

とする総合的学習を構想している。

すなわち、前者の主題では社会諸科学の総合がめざされており、後者の主題では社会科学の総合にとどまらず、さらに自然科学・技術学・人文諸科学との結びつきをもめざし、積極的に境界領域の開拓が意図されているわけである。これが本来、総合科学部の理念であるとわれわれは考えている。

### (1) 「社会構造」

この研究主題には、次のような科目が設けられている。

国際政治論、国際経済論、国家論、現代行政論、政治思想史、政治社会学、法社会学、法制度論、社会人類学、通文化研究、比較民族学、応用人類学。

現代社会の特徴は、国際関係の緊密化、異なる社会体制の共存、国家の役割の増大、いわゆる「第三世界」の比重の増大等である。

これに応じて、国際関係論、国家の行・財政、両体制の政治・経済・法・社会の比較研究、また現代の法制度の基本的知識を与えそれを前提としながら、現代法の動態を経済・社会の現実の運動と問題性との関連の下に捉え、社会科学としての法律学をめざす法社会学、さらに第三世界を主要

な研究のフィールドとし、種族民社会の比較観察を通して社会構造の諸原理の探究をめざす文化人類学等が用意されているのである。

なお、いずれのテーマについても共通であるが、これら諸研究相互の位置・関連を見失わぬために、社会科学方法論の学習が必須とされている。

## (2) 「技術・開発」

この主題には、次のような科目が設けられている。

技術史、技術論、技術学各論、技術の経済学、産業経済論、労働政策論、労働関係法、国際開発論、地域開発論、財政学、開発関係法論、経済計画論、社会経済統計論。

現代社会の特徴は、さらに、科学・技術が社会の中で果たす役割、社会へのインパクトの巨大さにある。そこから、あるときは社会の進歩発展に対して、科学・技術はあらゆる矛盾を解決する万能薬のように説かれ、一旦、社会的諸矛盾があらわになるや、忽ち、科学・技術を一切の悪の元凶であるかのように説く反科学・反技術思想が流行する。これはすべて、科学・技術が社会経済の中に正しく位置づけられて十分に研究されていない

が故であるとわれわれは考える。つまり、科学や技術は、社会関係をはなれて存在したことはないし、また社会関係のプリズムを通さずして社会に影響することもあり得ない。そこから、科学・技術の政治・経済・歴史の社会科学的諸研究が据えられているのである。

また、技術の変革を主要な契機として、今日、産業、職業、労働の構造・性格が大きく変動している。さらに国家と資本の主導の下に行なわれる「開発」は、重大な社会的諸問題を惹起している。そこで産業・労働・開発の諸問題に関連する諸科学が用意され、さらに、これらの諸問題に対処するために必須の手段となる社会経済統計ならびに計画に関する諸研究が設けられているのである。

社会文化講座は、この二つのテーマを選択し、それを主軸としながらも、総合科学部の一環としてその特色を生かし、地域文化、情報行動科学、環境科学の他の各コースの科目を大はばに、自由に組み合わせ、多彩なあるいは有機的な、総合性のある学習プログラムを組み得るよう配慮されている。学生諸君の意欲的勉学を期待するものである。(T記)

# 情報行動科学コース紹介

岡 本 雅 典

「ヒト」という生物が他の動物と全く独自の発達形態を取って今日見られるように他の動物とは較べもののない程高度に発達した「頭脳」を持っているという事実が我々に「情報」という問題を考えさせる出発点である。我々人類は道具を使用することによって発達して来たと言われるが、道具を仲介として形成された人間の「思想」は言葉を通じて伝承されて来ている。この思想を支える言葉は文字の発明を通じ、保存かつ伝えられ、さらに近年の目覚ましい技術進歩により全く違った形態でも保存、あるいは伝播され、それが伝統的思想・概念の急激な分解と再形成を行わざるを得なくなっている。このように技術と思想を人間の行動を通して結び付けるものが「情報」と言われるものの本質的一面であろう。したがってこのような統合的連結的機能をその一面として持つ

「情報」の研究を行う情報行動科学コースは総合科学部の名に真にふさわしいコースである。

それでは総合科学部の中で情報行動科学コースは何を具体的に研究するのであろうか。

まず図形・音声の認識、言語構造の解明等に見られるように情報源そのものの研究やその背後にある抽象的な代数的構造に関する理論。次にこれら情報の伝達変換にともなう種々の理論的問題、さらに得られた情報の処理方法の問題。これらは言葉あるいは符号の通信技術上の問題でもあるが(これらはたとえば工学部で研究されるであろう)本コースでは生体内での感覚情報の受容、伝達からさらに神経・筋を通じての信号の伝達機構の解明の研究に主眼を置いている。これら生体の機構を通じて作られた人工的抽象モデルに基づいて最も有効な情報変換伝達方法を求めようというウイ

ナー以来の思想はコースを貫抜く精神の一つでもある。さらに生体の情報組織の統制の取れたやり方をまねる必要がある。この方面の研究につながるのがネットワーク理論や制御理論である。さらにある面では人間の頭脳以上の事をやり、ある面では人間の頭脳にとっても及ばない電子計算機の役割は情報の有機的処理にとっては不可欠である。したがって本コースでは学生が電子計算機を自由に駆使できるという前提で多くの研究教育計画が立てられるであろう。したがって本コースでの履習を希望するものはプログラミング通論とその演習を通じて関連する基本的技術を習得しておくことが肝要である。

しかし集めた情報をいかなる立場で、またいかなる目的で整理するかという計画には各専門分野での知識を必要とするが、どの分野からにするにしろ、現代統計学の知識なしにこれを行う事は不可能である。以上の諸研究は主として「情報行動基礎」講座で行われる。

さらに何の為に情報を整理するかというと、これは人間とその集団にとって必要な意志決定とその後の行動調整のためのものである。したがって、

そこでは人間行動の理解が不可欠となる。この人間行動を客観性のある証拠によって明らかにすると共に統一的に組織付けようとするのが、「人間行動」講座での研究である。そこでは動物行動との比較関連も研究される。したがってまず小さくは個人の知覚、動機、学習と思考等個人行動に入るものから、広くは小集団内の関係、社会学で取扱われる社会階層関係、社会的かっとう等の研究も含まれる。これら人間行動・社会行動の研究手法の中にはかなり数理的なものもある。したがって、この方面に進まんとする学生は他コースでの授業科目をも多く取ることが望まれるし、また総合科学部としての強味を発揮し、これが自由にできる。この点は他学部にもその類例を見ず、学生に取って誠に好ましい状況が許されている点に注意されたい。さらに当コースは文科系志望の学生、理科系志望の学生いずれにも開かれているが、従来文科系が得意だったと思うものは初年度において数学、化学、生物学等に関連する授業科目を、理科系が得意だったと思うものは、同じく心理学、社会学、生物学等に関連する授業科目を意識的に多く履習されることを望む。

## 環境科学コース紹介

佐久間 元 敬

科学の急速な発展にともなって、自然科学の諸分野の研究では、近年そこで要請される個々の専門知識が極度に高度化し、専門化してきている。これにともなって、これら諸分野の研究・教育にたずさわる人が質、量ともに飛躍的に増大し、年々大量の研究の諸結果が発表されてきている。そしてこれらの結果は主として、関係する分野の学会誌を通じて発表されるのが通例であるが、情報伝達の方法が発達してきた今日、そのおびただしい情報の氾濫は我々を悩んでいる。

こうした自然科学の目覚ましい進展は、伝統的な諸分野の研究のみ留まっていなくて、新しい学際的な領域に研究課題を求める研究者群をうみ出し、或は又これらの自然科学の諸分野を個々の学問体系としてでなく、全体としてとらえる、いわゆる総合化された科学としての研究とか、これらの有

機的なかかわりあいに関心をもち、視点をのぞいた研究が行われるようになってきている。こうした傾向は、最近の世界各地の大学で新しい試みとして注目をあびてきている。

環境科学コースもこの様な見地にたつて、カリキュラムの編成が行われている。コース内には、基礎科学研究、自然環境研究の二講座が設けられ、数学、物理学、化学、生物学、地学、地理学、天文学、科学史等の教官を配して、これらさまざまな領域の教官の協力のもとに、総合的研究、教育をすすめるようとしている。

ここで「環境科学コース」という名称について一言したい。ここでいう「環境科学」とは、近頃よく話題にされる公害の問題とか、それに関連する生活環境に関する科学といった狭い範囲の科学を意味しない。こういう問題の取扱いもその一環

として当然含まれもするが、コースを通じての共通理念はもっと広範なものである。我々は自然を先づ人類の生存する環境という観点からとらえ、自然科学の諸分野にわたる広い視野をもって、これらを体系的に把握しつつ、自然界の諸現象を多面的、多角的に解明していこうというのである。

この様な観点に立つてみると、そこで自然発生的に生ずる研究課題は無尽蔵にあり、極言すればあらゆる既存の科学はそこに存在価値を見出せるのである。そして種々の現象が複雑にかかわりあっている自然界の諸現象の解明には、さまざまな領域の協力が必要なことはいうまでもあるまい。又、新しい視点に立つならば、従来の学問体系それ自身においても、色々と問題もあり、新しいアイデア、新しい方法の導入が要望されている。

ローラン・シュバルツは超関数編の創始者として知られているが、全米数学会議で次の様な趣旨の講演を行っている。

現代の数学者は十分には物理学を知っていない。その一つには、数学で知るべきことも、物理学で知るべきことも、近時急激に増大してきたので、数学の内部でさえ専門化せざるを得ず、数学者を各分科に分つよう余儀なくし、数学者を物理学者から引き離させることとなった。他方では、ここ20年ほどの間に、最大の進展をとげた数学の部門、特に代数学と代数的位相数学は物理学と余りに関連をもっていない。そこで、この方面に志

す数学者は自分の問題に専念するあまり、物理学に興味を失うことになった。さらに彼は、数学者が物理への興味を失う一因として、物理の本での扱いは、余りに厳密性を欠いていることに言及して、その二、三の例をあげている。そして、理論物理学が確信をもって発展していく為には、数学の厳密な基礎に立たねばならないから、物理学をもっと数学的にしっかりした形に書き直さねばならない、とのべている。

この様な見解に対応する数学への注文は又物理学の側からもなされるのであろう。ただそこで述べられていることは、個々の強固な根を張っている既存の諸科学においても、まだまだ十分満足すべき状態にあるとはいえず、相互間の協力が必要なことを示している。

環境科学コースの教育は、先づ諸科学の基礎的な理解に重点がおかれる。そしてその上に立つて、演習、実験、実習等を通じて幅広い教育・研究を展開しようとしている。繰返すようではあるが、総合科学は既存の諸科学の単なる寄せ集めを意味しない。それよりも、更に進んだ、文字通りにこれらが融合した一つの有機体として把握すべきである。個々の学問分野それ自身の理解でも大変なのに、そんなものが出来るものかと反論されそうである。しかし我々は困難ではあろうが、積極的に計画をおし進めようと思っている。

## 共通講座外国語を思う

坂 口 昇

総合科学部創設の大きな狙いの一つに外国語教育を改善し、学生の語学力を飛躍的に増進し、将来国際舞台で十分に活躍できる人材の育成ということがある。四つの研究コースがあるが、外国語はそのいずれにも属さぬ共通講座として全学生必修科目、しかも初修外国語は1年次に集中してできる限り速やかにそれを活用できる素地を作ろうとしている。各コースがたて糸とすれば、それを横につらぬくよこ糸の役割を演じ、もって真に総合科学部に肉付けをする立場にあるといつてよい。

ところで国際舞台で活躍できる語学力といえ

当然国際相互理解という外国語学習の大きな目標の実現にも連なるわけだが、このことに関してまことに他愛もない話を少し書くことを許して頂きたい。

終戦直後米軍通訳の仕事をしばらくやっていたことがあるが、ある日、米軍二世将校と一緒にジープに乗って山中のある基地にさしかかった。急にジープを止めた彼は一つの墓石を指さして、「アレハナニカ」と尋ねてきた。見れば苔むした墓石に「南無阿弥陀仏」と真宗の御名号が刻んである。私は突嗟に、「最初の二字はアー、残りはメン、

あわせてアーメン」と苦しまぎれな返事をしてしまった。「オウ、アイシー」と彼は納得し再びジープを走らせて行ったが、やがてまた車を止め、「スモール・コンビーニアンズ」と言ったかと思うと、車をおりすたすと近くの茂みに入りこんだ。何のことやら分らぬままポカンと待っている私のところに、やがて舞戻って来た彼は、にこにこしながら私に言った。「スモール・コンビーニアンズ、つまり小便だよ」馬鹿にされ、狐につままれたような気持の私も、やがてその joke が分り、思わず笑いにさそいこまれた次第である。

ひょっとすると彼は、はじめから「南無阿弥陀仏」のことは知っていたかも知れない。文字だけが読めないで、私の説明を、理解したというよりも、彼の既得の知識と「南無阿弥陀仏」が、私の言葉で忽ち直結できたというだけの話で、私はそのキッカケを与えたに過ぎなかったのかも知れぬ。Amen には truth の意味が元来あり、阿弥陀仏が真実者を表わすこともできるとすれば、私の説明はマンザラでもなく、むしろ和文英訳、あるいは翻訳の技法から言えば一つの典型でもあったかな、としばらくはいい気になっていたこともあるが、考えてみればこれはあくまでも技法に過ぎず、真の国際理解からは程遠いことだったと今では深く反省している。ところで「小便」をスモール・コンビーニアンズなどとやるのは全くの遊びであり、はじめの話とは全然別の世界のレベル以下の話題にすぎず、彼も私をからかっただけのことだが、よく考えてみれば、このレベルでの文字ウツシに満足している翻訳が我々の周辺に皆無だとはいえないのではないか。この米軍二世と私の間には、両者の母国語が全然共通の地盤がなかったわけではない。彼は多少なりとも日本語、あるいは日本文化についての知識が背景として存在し、私は私なりに僅かではあったが、英語、あるいは英語文化に関する知識もあった。少々の誤解が介在したとはいえ我々の相互理解は何とか成立して笑いのうちに事は終っていたのである。

しかしながら、外国語の教育研究を職としている我々が一番恐れていることは、我々がいわば外国文化理解、国際相互理解のための先達の使命になっていると自負するならば、自分が対象としている外国文化理解が果して真になされているだろうかということである。我々の日常には、いか

にも国際相互理解が成立しているようで、実は相互の誤解に基づいた生活の繰返しがあるのではないかという恐れである。御承知の方も多いと思うが、戦時中日本軍に囚われの身となった連合軍捕虜に対し、薬品の不足から、灸（きゅう）の治療をした日本軍々人があった。全くの善意、人道主義から発したこの行為も、灸（きゅう）という習慣を知らぬ欧米人にとってはただの残虐行為としか受け取れなかった。「肉体を burn することによって」などと翻訳でもしたら、善意の灸もゴモン行為だと受取らない方がどうかしている。事実この事件は、結局誤解以上に発展することなく、為に悲惨な刑を戦争裁判で受けるという結末に終わったと聞いている。このような悲劇的終焉は相互誤解の生み出した悲しむべき結果であるが、これとは逆に、一見それほど大した影響もなく、従って極めて安閑とした誤解の生活が限りなく我々の周囲で繰返されているのではないかと思うと、国際相互理解のためのいわば第一線に立っている我々外国語教官としては襟を正される思いがしてならない。

総合科学部の各コースを横に結ぶ外国語講座は、勿論各国語の実用面を重視して、機械を用い、外人の応援も受け、あらゆる工夫、出来る限りの方法を講じていわゆる語学力のレベル・アップに最大の努力を傾注するが、それは先程から述べている如く、ただ瑣末的技法を授けようとするものであってはならないはずだ。早くから我々は外国語委員会を結成して、大学における真の外国語教育のあり方について考究し続けてきた。我々は諸外国語を「言語」としてとらえようとし、現代的視点から、創造性、社会性、批評性というあらたな理念を設定し、我々のあるべき姿について既にある成案を得ている。今後は全員一致この確信のもとに協力態勢をとって理想実現に努力する覚悟である。期待していただきたい。

# 保健体育講座

荒井 貞 光

最近海外へ出張、あるいは留学した人から、体育やスポーツに関わることがらをずいぶん耳にする。脱工業化社会という米国では年間 100万人が Heart Attack (心臓病) にかかり、50万人が死亡し、あとの50万人をどのように体育やスポーツ活動で社会復帰させるかが非常に大きな社会問題になっているという。生死に関わる体育、スポーツというのも味気はないが、体育やスポーツをとりまく現代の状況にはフンと鼻であしらえないシビアな問題が確かに存在する。一寸ころんでもすぐに骨折する子供達、たまに野原へ出ても右往左往とまどうばかりという遊びの貧弱さなどミクロな問題から、健康と公害、あるいは世界政治と手段化されたチャンピオンスポーツなどマクロなものまで関連する問題は広範囲にわたり、それだけに体育やスポーツは単に身体運動に留まらない思想や文化との関わりが重要になってきている。諸君の身体一つをとっても、おそらく大多数の体力や運動能力は低下しているだろうし、その原因の一つに受験生活をあげることは概ね肯定できる因果関係のようである。これは体育研究の分野で生物学的退行現象とよばれている一種であるが、心身ともになお発達段階にある諸君にとって、否社会全体にとってもまことに憂うべき社会問題だと言えよう。

保健体育講座は、保健体育理論と体育実技をとおして、これらの体力や健康の問題、スポーツと社会など現代的な課題に対し、できる限りの挑戦を諸君と共に試みるつもりである。医学や生理学、あるいは哲学や社会学など基礎的諸学をとりいれながら、体育と人間についての問題に総合的にアプローチし、諸君の一人一人が体育やスポーツについてもある程度のプロフェッショナルになることを目標とし、理論と実技を有機的に行なっていく。

## 「保健体育理論」

保健体育学は専門科学の一分野として人文社会および自然の諸科学に接点を持つ。これら諸科学

を基盤とし、専門的研究結果をふまえ、一般教育の一端を担うものとして講義が行なわれる。人体のしくみおよび運動のメカニズム、個人衛生と環境衛生、体力の概念と体力の増強法、スポーツ障害、健康管理のあり方など保健分野と、体育やスポーツが身体文化、運動文化として継承され発展されてきた歴史的、社会的問題、労働と余暇活動、さらにはわが国のスポーツを客体視するための比較スポーツ論などの体育分野からなりたっている

## 「体育実技」

大学は知的機関であることは言うまでもないが、同時に健康で有能な社会人の育成をめざす実践的教育の場である。体育実技は教育の最も基礎なるものとして、また低下している体力回復という当面の問題解決のために、さらには最近その要求のたかまっている生涯体育の面をも考慮し、自らを鍛え自主的、創造的な意欲を持って様々な身体活動やスポーツ活動を自己運動化できるような豊かな人間生活を送れるための基礎づくり—オリエンテーションなどをその目的としている。

以上のように保健体育科目は、幅広い保健体育理論と体力の増強面、また将来社会人として各種スポーツに積極的に参加できるような技術修得をめざして授業が行なわれる。従って本学における保健体育は、ただ単に運動技術の形成や、心身の鍛練、体力の維持増進にのみその目的を持つものではなくて、その科学的裏づけとしての理論を基礎に人間尊重に深く根ざした人間思考と高度な行動力の育成をめざしている。

受講期間は大学生活の半分にも満たない現実があるが、諸君はその限られた時間と環境の中でまず十二分にその青春のエネルギーを爆発させ、運動することの喜び、仲間とするゲームの面白さを経験し、人間の体のしくみと自分の体力や技術のレベルを認識してほしい。さらに運動技術をたかめ、体力を増強していく主体的な活動のなかで、また仲間やリーダーとのスキンシップな集団活動

のなかで、自己の心身にわたる可能性を追及してほしい。同時に、これまで学校教育として行ってきた体育やスポーツを、また一般社会でくりひろげられるスポーツを冷静に主体的にとらえなおす思考作業も必要であると考えている。

日本人とアメリカ人の社会的行動様式の差の原因の一つに体力の違いをあげる人もいる。ビジネス

の場ではそのタフネスを誇っても、仕業を離れた遊びの場までは彼らにつきあいきれないと言う。スポーツによる社会への適応は、われわれになじめない面もあるが、インターナショナルな教養人をめざす総合科学部の学生たる諸君にとって、非常に重要な課題になってくると考えている。

## ボクの願いと意識の流れ

陣 崎 克 博

概して頭の良いヤツは健康に恵まれず、美人は性格が良くない。人生何もかも完全に揃っていることはまれである、というのがボクの人生哲学である。

アメリカの大学の講義を十二年ぶりに傍聴しながら、しみじみと噛みしめたのは他ならぬこのボクの人生哲学であった。ギョツとしたのは、授業中アイスクリームや菓子を食べている女子学生が数人もいるということであった。西部の某大学三・四年向けの十四・五人のセミナーでの話である。そのうちの一人が途中でこっそり出て行ったので、エスケイプでもしたのかなと思っていたら、暫らくして新しいアイスクリーム・コーンをしゃぶりながら帰ってきた。ショックだったのは、学生が教授に呼びかけるのにファースト・ネームで「デイヴィッド」と言っていたことである。十数年前や東部の大学では、考えられもせず又見られなかった現象である。逆に目を見張らせたのは、教授对学生相互の活発な意見の交換である。教室全体が沸き返り躍動している、という表現の方がより適切かもしれない。個人差はあるが、くだんのアイスクリーム女子学生も含めて大部分の者が討論に参加し、デイヴィッド・ウイルソン教授もいささか辟易ぎみであった。

半ば感心し、半ば呆れながら、ボクは考えた。この活発さ、この積極性は、一体何に由来するのか。伝統的な国民性なのか、家庭教育・初中等教育のあり方なのか。教室でのこのような自由な言動を許容するおらかな社会風潮なのか。教授方法がうまいのか。日本の大学の「お通夜」のような教室風景を、自虐をこめて異郷の空に思い浮か

べてみた。

『教授方法の改善。大いに反省します。しかしそれにしても、われわれの、いやボクの感性のなかに「もの言えは昏寒し秋の風」「男は寡黙をもって良しとす」「黙っていても腹で通じる」式の何かが、いぜんとして残っていることは否めない。平常の教師・上司の態度が活発な発言を阻害していることも事実である。公式な場での討論と私生活又は私的な感情を混同するジメジメした風潮がないとは言えない。教室や会議の席上でどんなに対立意見を出して激しく論争をしても、プライベート・ライフではカラッとさわやかに親しく交際できる雰囲気をもっともっと作るよう努力をしたい。先生だから黙っておこう、先輩だからマアマア……という考え方・態度は、絶対に学問の進歩につながらないナ。

『教室で下手な発言をして他人に笑われるよりは隅の方で小さくなっている方が良いという考え方は、卒業後ずっと一つの会社に勤め「おかげさまで大過なく過させて頂きまして……」で停年退職するを一つの理想像とする職業意識、「マアマアそんなやかましいことを言わないで赤坂で飲みながら話をまとめましょう」という仏教的寛容さやルーズさなどと共通するところがある。どうも日本人の性格は、進んで新しく実験的なものにアタックするよりは、旧来の伝統を固守することの方が好きなようだナ。

『新しい学際領域を開拓しようとする総合科学部で、もっとも要求されるのは「創造性」であろう。創造性のない「総合性」はマンネリズムに墮する危険があり、創造性のない「人間性」は痴呆的善

人を養成するに過ぎないからだ。そこで、創造性の養成のためには万全の努力を払わなければならない。約20年前ペンシルヴェニア大学では、新しい「アメリカ研究」プログラムを設立するに当たって、ある一人の教授に二年間他のことは何もさせないで、その立案に専念させた、という。教官サイドからは、そういう暇がほしい。重点的な能率主義を期待したい。委員会などの諸事に膨大な時間を費し、教官が運営の諸事に介入し過ぎるのではないか。肝要なことのみに関与を制限し、研究にもっと多くの時間を割くようにしたい。一つのことをなすとげるためには、何かを犠牲にしなければならないのではないか。既に決意したように、教授法の改善、積極性・創造性を培うための教官側の意識の改善も行なおう。ひるがえって学生諸君に望みたいのは、単位を習得して卒業すればよ

いという安易な気持でなく、「創造性」を先頭にして「人間性」「総合性」を涵養すべく、燃えるような熱意をもって学問に取り組もうとする意欲だナ。これあってこそ、彼らは総合科学部第一回生としてのパイオニア的重責が果たせよう。』

他国の思想・制度・価値観を、自国のそれで測ってはならぬことを学ぶのが、地域研究の目的の一つである。冒頭数行の表現の中で、ボクは心ならずも自国の価値観を適用しかけているが、アイスクリームを教室で食べていたからといって、それを批難する必要もないし、いわんやまねる必要もない。総合科学部の卒業生は、獨創性に富むと共に礼儀正しく、頭が良くて健康で(男)、美人で良い性格(女)であって欲しいというのが、ボクの願いである。

## 総合科学部設置申請書の作成にあたって

山 本 正 男

広島大学教養部が改組され、今年度から総合科学部として新入生を迎えることができ喜びも一おであります。

総合科学部が発足するにあたり私達事務官一同はその業務の一端をお手伝うことができたことを誇りとしております。これもみな教官・事務官の一致した団結の賜物と思います。

私達事務官は総合科学部が発足するまでの長い期間申請書作成の業務を担い連日連夜のあの強行スケジュールを成し遂げたことを思うにつけ、ただ頭のさがる思いがして教官・事務官の協力に深く感謝している次第です。

振り返ってみれば、教養部は昭和48年5月に総合科学部新設を昭和49年度の概算要求として提出しました。

そして、昭和48年8月末に文部省議でこれを認められたのであります。それから2ヶ月後の11月には学部新設のための予備審査が行われることになり私達は、各係に申請書作成の分担をきめて、審査に間に合わせるための膨大な設置申請書を作る作業に取りかかりました。事務官もこの設置申請書を作ることは初めての者ばかりであり、また、

総合科学部が全国で初めての学部であるために大学設置基準にあてはまるものが少なく、カリキュラムは玉虫色(一般教育科目と専門教育科目がどちらにでも振りかえられる)であるためにどのような書類を作ればよいのか、色々と文部省と打合せをしながら書類の作成を急いだのであります。

しかし、打合せのたびに訂正等があり、提出期限も迫るという中で印刷業者に原稿の訂正をさせたために業者はついに悲鳴をあげて来た。業者が悲鳴をあげても印刷はやってもらわなくてはならない。

また、教官スタッフを整えるため、他大学に依頼している教官の履歴書・承認書等を電話で連絡し、催促してもなかなか書類が届かない。印刷を間にあわせるためには事務官を東京、京都へと派遣して一刻も早く書類を持ち帰り印刷に出さなくては書類が整わない、等この様なきりきり舞をしながらやっと11日の予備審査の資料が出来上がった。

何と資料は全部で450キロもの膨大なものでした。

提出期限ぎりぎりであったため事務官7人でもって文部省に持参したわけです。早速係官に見て

もらったのですがまだ一部分字句の訂正をしなければならぬ箇所が指摘があったが、持ち帰って訂正をすれば期限に間に合わない。そこで文部省の会議室を借り、修正部分のタイプをたのんでもらい、7人で切り貼り等の修正作業を行ってやっと完納しました。

こうして間に合せた書類の予備審査を終えると、今度は1月中旬に本審査があります。

予備審査で部分的に修正を指摘されたものを訂正して、また同じ部数の資料を作り、本審査をうけ、2月末の実地視察を終えて6月に無事総合科

学部が誕生したのであります。この誕生した総合科学部が今後どのような学部として成長していくか、いまや全国的に注目されているのであります。

総合科学部教官団の研究、教育がいままで以上に充実されることは勿論のことですが、大学全体の温い理解と協力があってこそ総合科学部が大きく成長し、全国的に注目を得る立派な学部として認められるものであると思います。

私達事務官も今後益々協力体制を強めこの学部の大成のために微力ながら尽していく覚悟であります。

## 編 集 後 記

総合科学部の新入生諸君、入学おめでとう。総合科学部は君たちの入学によって新しい学問を目指して船出した。その船出を祝って、『総合科学』創刊号を発行する。

新入生諸君はいま日本で最初の総合科学部に入学したばかりで、「総合科学部」とはいかなる学部であるのか、「総合科学」とはいかなる学問であるのか等、期待と不安の入りまじった気持ちで授業開始を待っていることであろう。だが、すべて新しい出発には期待と不安とはつきものである。問題はのみずみずしい初心をいかに持続するかにあると言えよう。その初心を忘れずに、教官と学生とが一体となって輝かしい未来へと船出しようではないか。

ところで、すべて航海には航海表や航海図が必要であり、それらが無い場合には正しい観測によ

り、それらを作成しなければならない。そして正しい航海術を会得しなければならないし、また航海日誌をつけなければならない。ここに『総合科学』を創刊するゆえんがある。

したがって『総合科学』はこの新しい学問の未来像を具体的に描き出すことを目的とする。そのために、教官の研究ノート、世界の学会報告、あるいは新分野の研究動向といった記事を掲載し、また対談、座談会などを開いて、情報交換の場としたいと思う。

また『総合科学』は教官と学生と事務官相互の交流の場となることを期待している。したがって次号よりは学生諸君の編集による学生欄を設けたいと思っているので、どしどし投書や意見を広報委員会まで寄せてほしい。

陽光まぶしい1974年の初夏、総合科学部は船出した。新しい時代の理想と幸福を目指して、未開拓の水平線を目指して。乗組員一同の無事と健闘を祈る。  
(M・記)